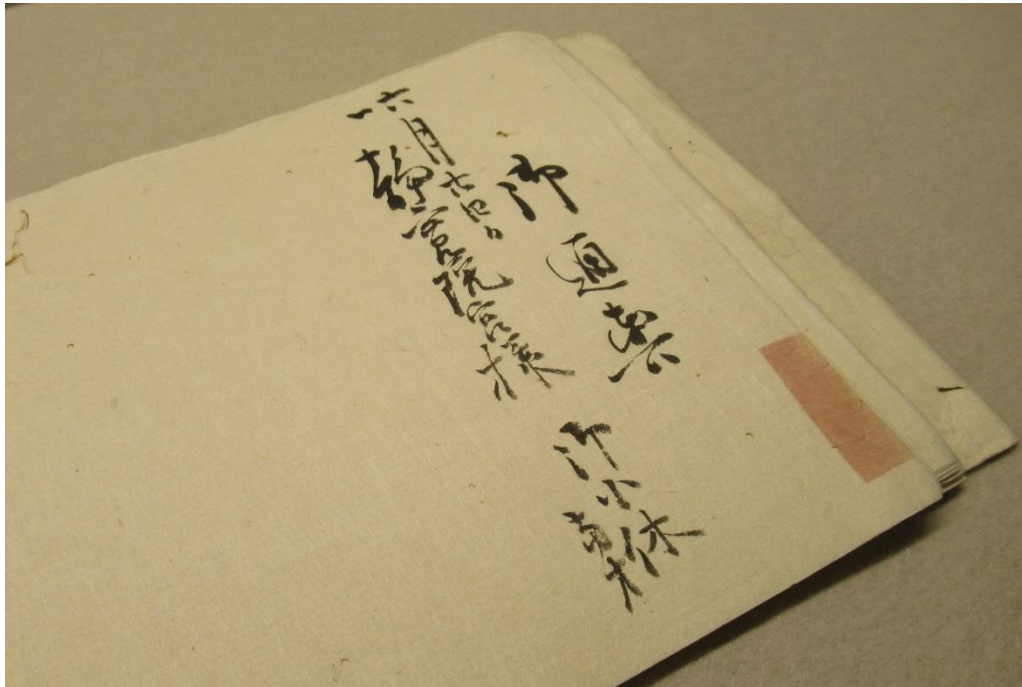


最後の「大福帳」に記された人物とは？



明治七年
めいじしちねん

大福帳
だいふくちよう

(草津宿本陣蔵)

本陣は、江戸時代に参勤交代で街道を往来する大名をはじめ、公家、幕府役人、宮門跡などの人々が利用した休泊施設のことです。現存する田中七左衛門本陣には、元禄5年(1692)から明治7年(1874)までの休泊について綴られた「大福帳」が残されています。明治3年(1870)の宿駅制度の廃止により、本陣・脇本陣の名目は廃止されますが、その後もしばらくの間は利用があったため明治7年までの記録が残っています。今回はその中から、明治7年の「大福帳」に記された人物について紹介します。

この年の「大福帳」の記載は、6月24日の「静寛院宮(せいかんいんのみや)」の一件のみで、つまりこれが「大福帳」に残る七左衛門本陣の最後の利用記録となっています。静寛院宮とは、第14代将軍徳川家茂(いえもち)に嫁いだ孝明天皇の妹君和宮の出家後の名前です。

文久元年(1861)10月20日、将軍家茂に降嫁するため京都を出発した和宮は、その二日後の22日、七左衛門本陣で昼食休憩を取りました。大規

模な行列は当日だけでは収まらず、前後4日にわたって草津宿を通過し、その人数は本体だけで2300人余り、近隣から集められた人足は1万人にものぼりました。翌年2月11日、将軍家茂と和宮の婚儀が執り行われましたが結婚生活は長くは続かず、慶応2年(1866)の第二次長州征伐の折、上洛中であった夫の家茂は病死。和宮は髪を落として「静寛院宮」と名乗り、明治2年(1869)に京都へと戻りました。その後、静寛院宮は明治天皇より東京への移住を勧められ、明治7年に東京へ向かう際、再び田中七左衛門本陣を利用し、休憩を取りました。

明治7年の大福帳をみると、静寛院宮の行列の人数は御輿の担ぎ手10人を含めて16人。文久元年の大行列と比べると、あまりにも寂しい行列でした。降嫁から13年、幕末の動乱を経て新しい時代へと向かっていく街並みを静寛院宮はどのような面持ちで見ていたのでしょうか。

(令和3年7月・史跡草津宿本陣 松本 真実)